

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：28003

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K19949

研究課題名（和文）国際的スポーツイベントを通じた都市ブランディングに関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical research about the city branding by an international sporting event

研究代表者

平野 貴也（TAKAYA, HIRANO）

名桜大学・健康科学部・教授

研究者番号：50412870

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、国際的スポーツイベントの観戦者、参加者を対象に調査を行い、その結果から、スポーツイベントのサービスクオリティを測定する尺度を作成し、イメージフィット、スポーツイベント満足度との関連、都市ブランディングに及ぼす影響を検証した。その結果、継続的なイベントの開催に向けて開催都市とスポーツイベントのイメージを合致させる取り組みを行うことが有効であると考えられた。さらに、開催都市へのイメージフィットを高めていくためにイベント主催者は、観戦者の特性を考慮しつつ、イベント開催の目的に応じて運営サービスの提供を行っていく必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、全国各地でスポーツイベントが開催され、地域活性や地域創生に活用されている。継続的なスポーツイベント開催のためには参加者の満足度とともに、地域社会への便益を高める必要がある。本研究の調査から得られた開催都市へのイメージフィット、サービスクオリティ、行動意図を高めるためにどのような行動を行うかといった研究成果は学術的意義があり、観戦者の特性（観戦回数、競技愛着、地域愛着など）に応じたイベントの運営やイメージ戦略を行っていくことは、今後の自治体やスポーツ関連組織が開催するスポーツイベントの活性、スポーツツーリズム人口の拡大に向けて活用が期待されるという社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this research, I investigated for the international sporting event spectator and the participant. From the result, I created the measure which measures the service quality of a sporting event, and verified relation with an image fit and a sporting event degree of satisfaction, and the influence which I have on city branding. It was thought effective to take the measure which makes the image of a host city and a sporting event agree towards holding of a continuous event. Furthermore, the necessity of providing management service according to the purpose of event holding was suggested, an event promoter taking a spectator's characteristic into consideration, in order to raise the image fit in a host city.

研究分野：スポーツイベント

キーワード：スポーツイベント イメージフィット サービスクオリティ 行動意図

## 1. 研究開始当初の背景

近年、わが国ではスポーツイベントの開催が増加しており、ランニングイベントなど参加型のスポーツイベント、東京オリンピック・パラリンピックやラグビーワールドカップなど観戦型イベントなどが多数、開催予定である。その背景として、スポーツ参加人口の高まりに加え、地域や自治体による地域振興策の一つとしての地域活性化を意図したスポーツイベントの開催が挙げられる。スポーツイベントが開催地域にもたらす効果には経済的効果、社会的効果、環境的効果が挙げられており (Fredline, 2005) 特に関際的なスポーツイベントの開催には地域経済の活性化や都市イメージの向上、開催地域のコミュニティ意識の醸成といった多様な役割を期待されている (原田, 2016)。

イベント満足度と観戦行動意図の関連を示す研究では、満足度の高いイベントは次回にも多くの参加者観戦者の来場が予期されている (e.g. Nogawa et al., 1996; Yoshida and James, 2010)。またイベント満足度はチームロイヤリティやアイデンティフィケーションを媒介として観戦意図を高めるという成果が示されている (e.g. Fisher and Wakefield, 1998; Matsuoka et al., 2003)。スポーツイベントを開催する自治体は、イベント開催時に多くの来場者があり、経済的効果、社会的効果をもたらすことはもちろんであるが、開催時期中だけでなくイベントをきっかけにして持続的な地域振興や地域活性を目指している。その目的を達成するためには参加者の地域社会とのつながりを強め、開催都市の魅力を開催地域内外に広め、定着させていく必要がある。

都市とのつながりを示す指標として着目した都市イメージは、"currency of cultures" と称され、内的外的なイメージが都市イメージに転写されることによって形成され、人々が持つ共有イメージや信念、価値観などを強める働きがある。都市ブランドとは地域の内外に都市イメージが構成されつつ、その地域に住む住民間にもアイデンティティやシビック・プライドが確立されて構築される「都市像」のことである (金光, 2016)。スポーツイベント開催によってイベントのイメージが開催都市に転写され、都市ブランドに影響を及ぼすことは容易に連想されるが、国内ではスポーツイベントとイメージフィット、都市ブランドに関する研究は押見 (2017) の研究が見られる程度で、進んでいない実情にある。我が国におけるスポーツイベントが開催都市に多くのベネフィットをもたらす、さらなる活性化を考える上で、スポーツイベントの開催が、都市イメージの変容に結び付いているのか、どのような活動が都市イメージを高め、都市のブランディングに結び付いているのか検証を進める必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究は国際的なスポーツイベントの調査を行い、まずスポーツイベント観戦者のイベント満足度と都市イメージを測定し、スポーツイベントが都市イメージに及ぼす影響を検証することを第1の目的とする。次にスポーツイベント開催に伴って自治体などが都市ブランディングを意図して行う活動が、都市イメージおよび都市ブランドに及ぼす影響を検証することを第2の目的に設定した。

## 3. 研究の方法

### 研究(1)

研究(1)では国際的なスポーツイベント観戦者の属性と観戦行動を把握し、アウトドアで実施される観戦型スポーツイベントのサービスクオリティ尺度の信頼性および妥当性を確認すること、スポーツイベントのサービスクオリティ、イメージフィットが行動意図に及ぼす影響を明らかにすること、さらにサービスクオリティの影響力にイベントの観戦経験、種目の実施経験、居住地域が及ぼす影響を検証することを目的に調査を行った。対象イベントは神奈川県で開催された国際イベント「FLY!ANA ウインドサーフィンワールドカップ横須賀大会 2018」を対象とした。本イベントは6日間開催され、約49,000名が来場した。調査対象とした2018年5月10日(金)から12日(日)の3日間には34,000名の来場者があった。

### 研究(2)

研究2では当初は、国際イベントにおいて参加者、来場者を対象にイメージフィット、都市ブランドについての調査を行う計画であったが、COVID19の影響で多くの人が集うスポーツイベントの中止、延期が続いた。さらに海外から選手が参加することが困難な状況が約2年以上続くこととなった。

そのため、コロナ禍で開催されたオンライン上の仮想空間で行うバーチャルスポーツイベントの効果に着目した。バーチャルスポーツイベントでは実際に開催地を訪れることや多くの人が集うことはない。ただ実際のイベントのコース映像を使用したり、コースを模したバーチャルリアリティ映像や地域の名所や特産物の紹介を見ながら競技に参加するため、実際のコースを走っているかのように感じられる工夫がなされ、実施されている。開催場所を訪れるわけではないが、映像を見ることで開催地の魅力を感じたり、その場で開催されるリアルなイベントに参加

する意欲を強めたりすることが推測される。ただバーチャルスポーツイベントに対する研究蓄積は乏しく、参加者の特性や参加動機、イベントの評価、行動意図、リアルイベントとの比較、開催方法に対する検討などは行われていない。そこでバーチャルスポーツイベント参加者の特性と活動状況、イベントへの参加動機、イベント満足度、行動意図を明らかにしつつ、オンライン上で開催されたスポーツイベントが、バーチャル空間で展開される開催地への行動意図を検証し、今後のオンラインによるイベントの開催方法について検討することとした。

対象としたバーチャルスポーツイベント「Tour de Okinawa Challenge 2020」には実施期間中に7,950名の参加者があり、完走者は4,381名であった。実走で開催されたツール・ド・おきなわ2018のレース部門の出場者(5,044名)のうち97.6%が国内からの参加であったことから実走イベントとの比較を行うために、本調査では国内からの参加者のみを調査の対象者として設定した。国内からの参加者205名中、119名からの回答が得られ、117名を分析対象とした(有効回答率98%)。調査方法はインターネット調査法を用い、申込時に得られた連絡先にインターネット調査票へのリンクを記載した電子メールを送付した。調査期間はイベント終了後の2021年4月1日から4月23日の約4週間を設定した。

#### 4. 研究成果

##### 研究(1)

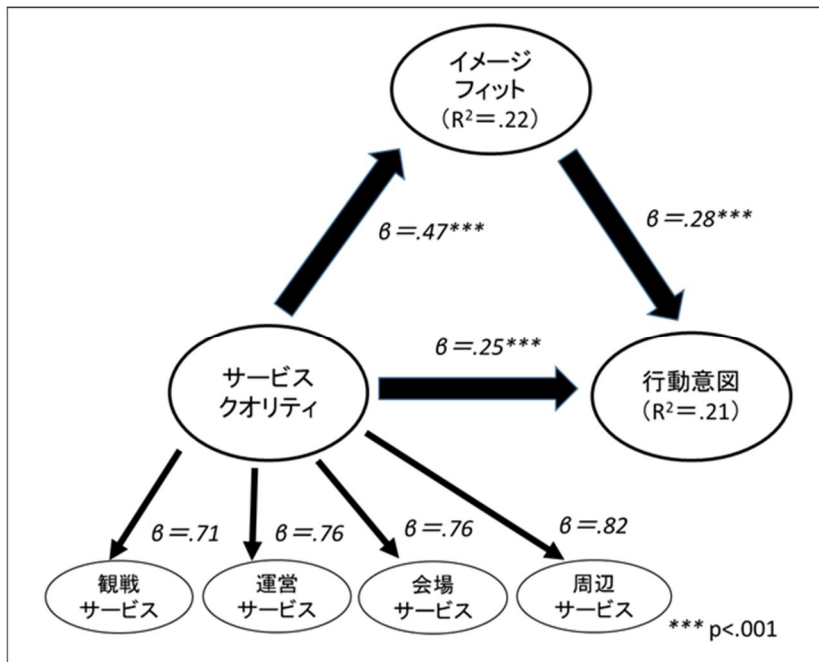
質問紙調査を実施し、477名(89.8%)が分析の対象となった。サービスクオリティ尺度の信頼性および妥当性が確認された(表1参照)。アウトドアで開催されたスポーツイベントのサービスクオリティは観戦者のイメージフィット、行動意図に正の影響を及ぼしており、特に運営サービスが大きく影響を及ぼすことが明らかになった。なおサービスクオリティおよびイメージフィットが行動意図に及ぼす影響については、観戦種目の実施経験と居住地域による違いは見られたが、観戦経験による違いは見られなかった。

継続的なイベントの開催に向けて開催都市とスポーツイベントのイメージを合致させる取り組み、例えば実施される種目の体験を促すイベントなどを開催することが有効であると考えられた。さらに、開催都市へのイメージフィットを高めていくためにイベント主催者は、観戦者の特性を考慮しつつ、イベント開催の目的に応じて運営サービスの提供を行っていく必要性が示唆された。

表1 サービスクオリティの因子分析結果

質問項目	Mean	SD	因子負荷量	CR	AVE	$\alpha$
<b>観戦サービス</b>				.86	.68	.73
会場でのアナウンスの聞き取りや内容	4.38	1.16	.85			
競技の見やすさ・わかりやすさ	4.16	1.20	.81			
会場での音楽	4.26	1.06	.82			
<b>運営サービス</b>				.78	.55	.79
大会の開催時期・時間	4.84	0.85	.74			
大会の運営・進行	4.71	0.87	.82			
大会スタッフ・ボランティアの対応	4.96	0.80	.66			
<b>周辺サービス</b>				.82	.60	.82
トイレ・休憩場所の数	4.43	1.07	.79			
会場での飲食(価格・種類)	4.60	0.95	.79			
競技以外のイベント	4.23	1.03	.73			
<b>会場サービス</b>				.79	.56	.79
会場内の掲示	4.68	0.93	.80			
観戦場所の確保	4.58	0.96	.78			
会場へのアクセス	4.90	0.87	.66			

CFI=.975, GFI=.959, AGFI=.934, RMSEF=.056



研究(2)

実走イベントであるツール・ド・おきなわ 2018 の参加者と比較して、平均年齢は約 9 歳高かったものの、性別、職業、居住地 (県内 19.5%、県外 80.5%) の割合はほぼ類似した結果が得られており、実走イベント参加者の属性をおおむね反映していると考えられた。

オンライン開催による手軽さとトレーニング成果や体力を確認できることが主な参加動機となっており、実走イベントの開催が困難な状況下において、スポーツ活動の継続に効果的であった。運営方法に関する満足度が高い一方、アプリの使いやすさの満足度は低く、改善の余地があると思われた。

バーチャルサイクリングイベントの開催は走行距離が少なく、競技参加の少ない者に競技への参加やトレーニングの機会を創出していると考えられ、新たな参加者の獲得や競技人口の増大に寄与していると推測された。またバーチャルスポーツイベントは行動意図につながる実走イベントへの参加意欲や開催地へ愛着などの要素を高めており、参加型スポーツイベントの活性化や開催地への来訪を促すツールとして活用できる可能性が示唆された。実走イベントであるツール・ド・おきなわへの参加や沖縄への来訪が意図されていると言える。またつまり、バーチャルイベントの開催がリアル(実走)イベントへの参加や開催地への訪問を促進する可能性を示唆している

表 2 走行距離によるイベント満足度比較

	少走行者 500km未満(n=48)			多走行者 500km以上(n=69)			Mann-Whitney の U	有意水準 の U
	平均値	標準偏差	平均順位	平均値	標準偏差	平均順位		
沖縄の自然や風景を満喫できた	4.57	1.20	67.07	3.86	1.68	53.38	1268.5	**
参加手続きの方法	4.38	1.02	64.28	3.90	1.54	55.33	1402.5	*
開催時期	4.31	0.90	61.91	3.93	1.58	56.98	1516.5	
コースのわかりやすさ	4.44	0.94	65.81	3.84	1.62	54.26	1329.0	**
イベント全体満足度	4.31	1.01	62.95	3.77	1.66	56.25	1466.5	*
参加費用	4.19	1.21	60.57	3.99	1.58	57.91	1580.5	
開催方法	4.27	1.12	62.18	3.88	1.67	56.79	1503.5	
コースの景観	4.27	1.03	65.07	3.75	1.62	54.78	1364.5	*
ツール・ド・おきなわに出場している感覚が得られた	4.27	1.36	68.11	3.54	1.67	52.66	1218.5	**
アプリの使い易さ	3.60	1.12	65.53	3.16	1.71	54.46	1342.5	

\* p < .05 \*\* p < .01

表 3 走行距離による愛着と行動意図比較

	少走行者 500km未満(n=48)			多走行者 500km以上(n=69)			Mann-Whitney の U	有意水準
	平均値	標準偏差	平均順位	平均値	標準偏差	平均順位		
沖縄への興味が増した	4.58	1.17	66.86	3.91	1.73	53.53	1278.5	**
沖縄への愛着が増した	4.48	1.13	64.07	3.96	1.72	55.47	1412.5	*
ツール・ド・おきなわに参加したい気持ちが 増した	4.71	1.18	61.92	4.30	1.70	56.97	1516.0	
沖縄やんばるを訪問したくなった	4.60	1.20	65.28	4.03	1.68	54.63	1354.5	*
次回もおきなわチャレンジに参加したい	4.38	1.28	66.38	3.77	1.66	53.87	1302.0	*

\* p<.05    \*\* p<.01

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 平野貴也	4. 巻 99
2. 論文標題 バーチャルスポーツイベント参加者のイベント満足度と行動意図 参加者に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 レジャー・レクリエーション研究	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平野貴也	4. 巻 9
2. 論文標題 アウトドラスポーツイベントにおけるサービスクオリティとイメージフィットが観戦者の行動意図に及ぼす影響：ウインドサーフィンワールドカップ観戦者に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 海洋人間学雑誌	6. 最初と最後の頁 53-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 辺土名斎朝・平野貴也	4. 巻 2
2. 論文標題 高校ラグビーの競技レベル別ステークホルダー比較研究 沖縄県の競技力を高めるための方策	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環太平洋地域文化研究	6. 最初と最後の頁 113-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平野貴也	4. 巻 1
2. 論文標題 観戦型スポーツイベントにおける観戦者の満足度と行動意図に関する研究 ウインドサーフィン・ワールドカップのサービスクオリティに着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名桜大学環太平洋地域文化研究	6. 最初と最後の頁 11 -18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平野貴也・井上照久・高宮駿介
2. 発表標題 学生ウインドサーファーの活動環境に対する 認知：活動継続意図と活動地域に着目して
3. 学会等名 第11回 日本海洋人間学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 久高有加・平野貴也
2. 発表標題 スタンドアップパドルボードを活用したウェルネスツーリズムの推進に関する実践報告
3. 学会等名 第11回 日本海洋人間学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 平野貴也
2. 発表標題 ウインドサーフィンワールドカップにおけるスポンサーフィットが観戦者の行動意図に及ぼす影響
3. 学会等名 日本海洋人間学会第9回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 平野貴也・岡安功
2. 発表標題 サイクルスポーツイベント参加者の大会満足度と地域愛着 - ツール・ド・おきなわ 2018 に着目して -
3. 学会等名 第21回日本生涯スポーツ学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 辺土名育朝・平野貴也
2. 発表標題 高校ラグビー選手のスポーツキャリアに関する研究 九州地区における競技レベルによる比較
3. 学会等名 第21回日本生涯スポーツ学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 平野貴也・岡安功・合志明倫
2. 発表標題 ウインドサーフィン・ワールドカップにおける観戦者のイベント満足度がイメージフィットと行動意図に及ぼす影響
3. 学会等名 令和元年度名桜大学環太平洋地域文化研所学際的共同プロジェクト発表会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 牛尾一也、平野貴也、宮崎景（他5名）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 デザインエッグ社	5. 総ページ数 66
3. 書名 SUP Textbook for Basic: SUP愛好者のための基礎知識	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------